【2】

氏　名(国　籍)	鄭（ちょん）　廣（くぁん）　姫（ひ）（韓　国）
学位の種類	博　士（教育学）
学位記番号	博甲第 1,595 号
学位授与年月日	平成 8 年 7 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	**韓国における外来教育思想の「土着化」に関する研究** **―「解放」後のデューイ教育思想受容に関わる哲学的考察を中心に―**

主　査	筑波大学教授		佐藤三郎
副　査	筑波大学教授	教育学博士	津曲裕次
副　査	筑波大学教授	教育学博士	朴　聖雨
副　査	筑波大学助教授		新井保幸

論文の内容の要旨

本論文は，外来教育思想の受容と定着の課題を「土着化」という用語において考察し，解放後の韓国におけるデューイ教育思想の導入過程を直接の研究対象にして，土着化段階論の視点からその現段階の位置を確認した上で，デューイ教育思想の受容を望ましい「土着化」過程の次の段階へと高めるために，現段階の課題を明確にして，この課題に即した哲学的・原理的検討を加えることにある。

本論文は，序章と終章を含めて全八章で構成されている。本文329ページ，文献目録16ページ，合計345ページで，1ページは1,200字であり，400字詰原稿用紙に換算すると，1,035枚に相当する。(ただし，注を含む。)

第一章は，本論文の基本事項に関する検討・整理に当てられ，次章以後の研究を進める上に必要な基礎作業を行っている。すなわち，本論文のテーマ概念である「土着化」の意味内容を検討・吟味し，概念整理を施して，本論文で使用する当面の概念規定を行うと同時に，土着化過程が一定の特徴を有する「段階」過程であること，それは基本的に5つの段階を経て進行することを論じて，次章の，解放後の韓国におけるデューイ教育思想受容の現段階を見定める尺度を設定している。

第二章では，解放後の韓国に於けるデューイ教育思想の受容と展開の過程を分析・整理し，そこに4つの特徴的な段階区分が見出されることを指摘して，この区分を，前章で用意した「土着化」段階論の内容と対応させながら再検討している。その結果，現段階が「土着化」第四段階（外来教育思想と既存教育思想との弁証法的緊張関係の段階）の初期にあると診断，従って現段階の課題は，「デューイ教育思想」と「既存教育思想」との間に建設的な緊張関係を促し，生産的な相互の研究対話をこそ推進することにある，としている。この現状認識に基づいて，現段階の課題に積極的に応える意図から，次章以後の，デューイ教育思想と韓国における既存教育思想との原理的な教育思想比較研究へと導かれる。

そこで第三章では，「土着化の対象」である外来教育思想の代表的事例として，その影響力の故に上記の「デューイ教育思想」を取りあげ，彼の思想の中核概念である「経験」を中心に，その原理的考察と再評価を試みている。彼の「経験」思想は，人間の生を，総合的・統一的な「経験」の連続態として捉える点に特質があること，また，デューイ自身が「経験」の構成原理として挙げた「連続性の原理」「相互作用の原理」の他に，彼の思想特質を最もよく表現する「実験的探究の原理」を新たに加えて，彼の「経験」概念の独自性を明確にするなど，著者の独自な視点から再吟味を行って，「経験」の意味内容を再評価している。

これに対して第四章では，「土着のもの」，即ち韓国における既存教育思想の代表的事例を特に「儒教教育思想」に求め，その原理的考察と再評価に当てている。儒教的教育は，長い歴史の過程で韓国人の意識と生活に深く浸透し，すでに韓国教育の独自な伝統基底を形成している。それだけに，その具体的表現形態は広範多岐にわたり，思想原理の確定には難しさがあるが，著者は韓国儒学の源泉にさかのぼる方法をとり，その最高峰である「退渓教学思想」にこれを代表させて，彼の思想の中核概念である「敬」を中心に考察・論究している。そして，そこに内包されている基本原理を「調和の原理」「漸進の原理」「並進の原理」として捉え直し，その思想の本質を再吟味・再評価している。

第五章は，前第三・四章で検討した両者の基本思想を教育の領域に布延し，これが教育の諸問題にどのように具体化されているかを課題とし，教育の本質論・目的論・方法論・教育者論にわたってそれぞれ詳細に考察・再評価しながら，両者に対する教育論的比較考察を行っている。とくに，両者の共通性と相違性と基本特質を原理的レベルに立ち戻って明確にすると共に，それらの意味内容を詳細に分析・検討して，この両者のいずれでもない新しい第三の教育思想の形成につながる可能性の諸要素を摘出することに努めている。

第六章では，前章までの研究結果を踏まえて，「土着化」論に関する総合的な批判考察を行っている。とくに，デューイの思想を「科学的経験主義」，退渓のそれを「哲学的経験主義」として総合的に捉え直し，両思想構造の独自性を明確にしている。その結果，両者はそれぞれに独自な意義と固有の難点とを内包していること，両者の比較研究は，相互に，相手の思想に対する重要な問題提起とこれを補正するための豊かな示唆とを自らの中に有し，相互批判と相互補完のすぐれた関係にあることを明らかにすること，従って，両者の相互吟味による緊張関係は，「土着化」第五段階の特質である新しい第三の教育思想の形成につながる可能性を多分に有すること，それ故に，今後共，教育の理論と実践の両面にわたって，両者に関する批判的比較研究を継続・深化させることの必要性と重要性を導き出している。

また，「土着化」過程には，「外なるものの土着化」（本論文におけるデューイ教育思想の土着化問題は，その適例である）の他に，「内なるものの再土着化」（本論文で，韓国における伝統思想の代表例として取りあげた退渓教学思想の現状は，その適例である）というもう一つの形態があること，従って土着化過程は，一定の段階を踏まえた一度限りの過程ではなく，らせん形状に一定のサイクルを繰り返していく発展的な「反復性」の過程であること，それ故に，新しいサイクルの度毎に絶えず新しい第三の思想形成につながる「止揚・総合」の契機を含むことなどを指摘し，この視点から，韓国における上記両教育思想の現状と将来を再度，論究している。そして同時に，他面ではこの「土着化」過程が，「閉ざされた独善性の問題」「外来教育思想の原型喪失の問題」「自国の伝統喪失の問題」という一連の新しい課題を必然的に伴うこと，従って，この付帯現象に対応する不断の努力の必要性を強調して，その基本的方策についても論考・提言している。

審査の結果の要旨

著者は，解放後の韓国において，デューイ型教育の圧倒的導入が，韓国のすぐれた教育伝統である儒教的教育の一方的廃棄をもたらしてきた現状に疑問を懐き，外来教育思想の望ましい受容と定着のあり方を，このデューイ教育思想の土着化問題を通して究明しようとした。「土着化」段階論の視点を導入し，この角度からデューイ教育思想の受容と展開の過程を分析し，現段階を「第四段階の初期」と位置づけて，それ故に，デューイ教育思想と既存教育思想との原理的再検討こそが，次の段階に飛躍する今日の課題であると認識して，この困難な課題に自ら大胆に取組んだ。

韓国教育学の極めて今日的課題に直接応えようとしたこの意欲と努力は，高く評価されてよいと思う。論文自体のスケールが大きいだけに，個々の面では掘り下げにやや不十分な点もあるが，全体的な論証と論述の確かさは，課程博士の水準を十分に充足し，上記の現代的課題に新鮮なすぐれた問題提起となっている。とくに，比較

しにくいデューイ教育思想と退渓教学思想の思想本質をよく吟味し直し，比較可能な形にまで整理した努力は高く評価され，今日，東洋諸国が共通に直面する西洋思想と東洋思想，外来思想と伝統思想との間に生産的な原理的「対話」の道を開くすぐれた先例になると思われる。また，この研究を通して著者は，土着化問題が，第一章で整理された基礎作業の範囲には収まりきれない面のあることに気づいて，これを指摘・整理すると共に，土着化問題に付随する留意すべき諸課題とその対応にも論及するなど，第六章には，今後の「土着化」研究に貢献するすぐれた研究知見が少なからず披瀝されている。

よって著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。